

いわき農林事務所ニュース 2005年7月号

活動状況

○地域農業に貢献 いわき農業青年クラブが農業賞受賞

6月21日、第46回福島県農業賞の表彰式が杉妻会館で行われ、集団部門・農村青年活動の部で、いわき農業青年クラブ連絡協議会（代表：坂本和徳、会員16名）が栄えある県農業賞十傑として表彰されました。

同クラブは、種まきから収穫までの農作業が体験できる「農業ふれあい講座」の開催や、親子料理教室にクラブ員が栽培した農産物を食材を提供して参加するなど、地域の住民を対象とした活動に積極的に取り組んでいます。地域に根ざした活動が地元農産物のPRや農業・農村の役割について理解を深めたことが高く評価され、今回の受賞となりました。

今後も積極的な活動を通して、ますます地域農業の発展に貢献することが期待されます。



受賞の報告に訪れたクラブ員

○環境にやさしい農業のための「水田除草機実演会」を開催

6月23日、「水田除草機」による環境にやさしい農業の実演会を、三和(みわ)町永井地区の「永井担い手水稲生産組合ライスセンター」で開催しました。

永井担い手水稲生産組合では、昨年度、組合員全員がエコファーマーとなり、環境にやさしい米(こめ)づくりに取り組んでいます。

水田除草機は、機械に乗ったまま、条間はもちろん、株間も除草できる最新型のもので、除草剤の回数を減らしたり、除草剤を使わない稲作が可能になります。

実演会には、環境にやさしい米(こめ)づくりを実践している農業者や、今後取り組みを検討している農業者など約40名が参加しました。水田除草機の説明を行った後、実際に除草作業を行い、効果や作業性などを確認しました。

いわき市内では、特別栽培やエコファーマーによる米(こめ)づくりが広がっており、今後も、安全・安心で環境にやさしい米(こめ)づくりの拡大が期待されます。



実際に除草機の効果を確認する参加者

○水稲のエコファーマーが倍増、新たに果実も認定

6月30日、エコファーマーの認定証交付式が県いわき合同庁舎で行われ、新たに25人（作物別29人）が認定を受けました。省エネルギー対策のため出席者には軽装で参加していただき、爽やかな交付式となりました。

作物別には21名が水稲で認定を受け、これによりいわき地方の水稲のエコファーマーは昨年度に比べ倍増となりました。環境にやさしい売れる米(こめ)づくりの輪が着実に広がり始めています。また、園芸作物では、これまで実績のあるトマトやキュウリのほか、今回初めて日本ナシで1名が認定を受けました。光あふれる園芸産地「サンシャインいわき」が環境にもやさしい産地として注目されるよう、これからも啓発・普及活動を継続していきます。

今回の認定で、いわき地方のエコファーマーは98人（作物別延べ116人）となりました。次回は8月に認定の予定です。



※主な認定者の横顔

○三和(みわ)町中寺地区の水稲生産者

今回、水稲のエコファーマーが多数認定されたなかでも、三和(みわ)町中寺地区からは8人のエコファーマーが誕生し、注目を集めました。

同地区では、生産組織の中寺アグリに水田約20haを集積するとともに、大豆のブロックローテーションを行うなど、集落営農に積極的に取り組んでいます。今回エコファーマーの認定を受けるに当たっては、集会所での勉強会を何度も開いて理解を深めてきました。

今後は、さらに集落ぐるみでの環境にやさしい米(こめ)づくりを進めていただけるものと期待されます。

トピックス

○渡辺小の「田んぼの学校」その4 草取りやメダカ放流を実施

6月17日、いわき市渡辺町で今年4回目の環境教育事業「田んぼの学校」が開催され、渡辺小学校の5年生21名が「草取り・ぼかし肥料まき・メダカ放流」を行いました。

5月27日に田植えした稲も、田植えから約3週間が経(た)ち、うるち米・もち米ともに膝くらいまで元気に成長しました。児童達も応援団もホッとひと安心です！

始めに草取りを行い、児童達は一列に並んで稲と稲の間の草を抜いていきました。田植えの際に除草用ペレットをまきましたが、やはり雑草は強く、稲と同じ高さの草がたくさん生えていました。作業の最中に、地元の達人から抜いた草を丸めて地中に埋めるというワザが披露されました。埋めた草が腐り、肥料に生まれ変わるとのこと、児童達は「さすが達人！」と感心していました。また、作業の途中にヘビが現れ、児童が大(おお)はしゃぎする場面もありました。

次に「ぼかし肥料まき」を行いました。「ぼかし肥料」は米ぬかやおからなどの原料を低温で発酵させた、ニオイの少ないペレット状のもので、2回目とあって児童達も慣れた手付きで行っていました。

最後にメダカの放流を行いました。地元で採取したクロメダカ20匹とメダカのエサとなるミジンコなどを、ピオトープ(学習田の端に作った小さな水たまり)に放流しました。児童達はメダカを放流する前に「たくさん増えますように」と祈っていました。秋にどのくらい増えるか楽しみです！

今回は、7月15日に行われ、草取りと生きもの調査を実施します。



メダカを放流する児童達



Tシャツ作りました！

生産者の取り組み事例

○農薬を使わない太陽がいっぱいのブルーベリーを食べてください！

いわき市 大和田自然農園 大和田雅夫さん

いわきの太陽をいっぱい浴びて実ったベリー類の摘み取り体験農園を営んでいるいわき市好間(よしま)町の大和田雅夫さんの取り組みを紹介します。

○経営概況

大和田さんの経営面積は、ブルーベリー、ラズベリー等のベリー類が約70a、水稲が1ha、水稲受託が6haで、水稲の作業と夏のベリー類の収穫、摘み取り体験農園の作業を、上手に労力を分散させた経営を行っています。

5年前、国道49号線と常磐道いわき中央インターチェンジ、高速バス乗り場のすぐ側(そば)という立地条件のよいほ場約30aにベリー類を植えつけ、3年前からいわき初のブルーベリー観光農園を開園しました。農園は雅夫さんと奥さんの智恵子さんが中心となり、娘の笑さんを含めて3名で経営しています。また、農園では昨年と同じくいわき市でブルーベリーの観光農園の開設を目指す、いわき市の農業研修生1名を受け入れています。

○農薬を使わない農園をめざして

大和田さんはもともとカーネーション、バラなどの施設切花を栽培していました。しかし、体質的に農薬まけしやすいため、農薬をなるべく使用しないで栽培できるものを色々と検討しているうちに、ベリー類の栽培、摘み取り農園の開設となりました。

現在は、「大和田自然農園」として、自家製のモミガラ堆肥を使って土作りを行い、健康な作物づくりを心がけており、ベリー類は農薬を一切使わず栽培しています。無農薬でも作物の病気は問題ないということですが、ケムシ、イモムシ類やハチなどが発生するので、お客様のことを考え、手で捕ったり、巣を除去して、安心して摘み取りができるようにしています。水稲も除草剤1回のみで極力農薬を使用せずに栽培しています。

○年々広がるベリー園

ベリー類の栽培は毎年規模を拡大し、現在はブルーベリーやラズベリー、ブラックベリーなど、早生から晩生までバラエティ豊かな様々な品種が作付けされ、6月から8月下旬までお持ち帰り付きの摘み取り体験（要予約）を行っています。

また、ジャム作り体験も行っており、ベリー類のジャムのほか、めずらしいルバーブ※ジャムの酸味のあるさわやかな味も楽しむことができます。

※ルバーブ

シベリア南部原産のタデ科の多年草で薬草の『ダイオウ』の仲間。繊維質とカルシウムが多く、生食のほか、ジャムやジュースに適する。

お客様の要望に応え、今年から休憩所を拡張し、お弁当持参で1日ゆっくり楽しめるようになりました。また、アイスクャンディーや地元の農産物などを販売するスペースを設け、新たに自家製(じかせい)びんづめジャムの販売を始めました。

ベリー類は摘み取り体験以外にも、地元の洋菓子店グループに直接卸しており、食の安全にこだわった農薬を使用しない果実は大変喜ばれています。低農薬で栽培した米とともにネット販売も行っています。

○ますますひろがる大和田自然農園、夢は「農園カフェ」

「今後は、もっとベリー園を拡大し、交通に便利な立地条件を活かしていわきの観光拠点となるような農園にしたい」「地域の農産物直売所を兼ねた“農園カフェ”を開設したい」など大和田さん夫妻の夢はまだまだつきません。息子さんも7月にいわきに戻って農園を手伝うこととなっており、大和田自然農園の発展と皆さんの活躍が益々期待されます。

お問い合わせは大和田自然農園 電話0246-36-2591まで、ホームページは[こちら](#)。



収穫を持つブラックベリー
(7月から摘み取り開始)



ジャムは摘み取り後にすぐに作って味わえる



養成中のカラント(すぐり)類のほ場で
左から雅夫さん、妻の智恵子さん、娘の笑さん

[[▲Top](#) | [福島県トップページ](#) | [いわき農林トップページ](#)]